

論文要約

氏名 恒安 眞佐

題名 The Relationships Between Proficiency and L2 Learning Variables: Personality, The Willingness to Communicate, and Motivation.

この論文は「学力と個人差の関係：性格・コミュニケーションの意思（WTC）・動機を中心に」に関するアクションリサーチである。本研究の目的は、第二言語としての英語習得に関する3つの要因の関係とその要因と学力の関係を明らかにし、英語教育に資することである。性格は内向的・外向的、情緒不安定・情緒安定と分類し、矢田部ギルフォード性格適正テストを使用して測定した。WTCは友人・知人・他人と4つの状況（ペア・グループ・会議・公共の場）でコミュニケーションを取ろうとする意思と分類し、WTCスケールを使用して測定した。動機は無関心・内発的動機・外発的動機と分類し、Language Learning Orientations Scale を使用して測定した。学力は認知学力的言語能力 (cognitive academic language proficiency: CALP) と基礎的対人伝達スキル (basic interpersonal communicative skills: BICS) に分類し、CALP は TOEIC、BICS は一連の絵を見て物語を英語で描写するタスクを使用し、発話量（節・単語・C-units）と流暢さ（ポーズを含めた節・ポーズを含めない節・2秒以上のポーズ・ポーズ間の節）を測定した。

3つの要因と学力に関して、TOEIC（CALP）で相関関係は見つからなかったが、3つの要因と発話量・流暢さ（BICS）で相関関係があることが明らかになった。また、3つの要因間に関して、性格と WTC、性格と動機、WTC と動機のそれぞれで相関関係が見つかった。これは3つの要因と発話量・流暢さとの関係性が独特であったことを示唆している。以上の結果を踏まえて、外向的な特性を持つ学習者にはグループ内で発話練習、一方、情緒不安定や内向的な特性を持つ学習者には個人で行う読解問題が適切であると考えられる。性格・コミュニケーションを取ろうとする際の場面と3つの動機（無関心・内発的動機・外発的動機）の間には複雑な関係があることを明らかにした。本論の内容は以下の通りである。

第1章では、第二言語習得で研究されている代表的な個人差の要因が概観され、比較考察される。その後、問題提起と本論の目的が述べられる。前述の通り、本論での要因とは、性格・WTC・動機とし、複数の要因と学力の関係における日本の高等教育を対象とした研究はほとんど見られないことを問題提起とする。これらの関係を明らかにし、大学英語教育において応用することが本論の目的である。

第2章は、本論で取り上げられている3つの要因に関して概観される。1つめの要因である性格は、各学生の性格を項目に分類することが目的なのではなく、学生の性格に適応した柔軟性のある授業を組み立てることの重要性を提言している。2つめの要因である WTC は、EFL の環境で英語を学ぶ学習者は WTC を高めることが難しいが、WTC の上昇に伴っ

て学習動機も高めることが可能であるとしている。3つめの要因である動機は、WTCを含め、第二外国語習得に関わる多くの要因が動機に影響を与えていることがまとめられている。学力に関しては、CALPとBICSの双方を伸ばすことが重要であると結論つけられている。

第3章は、研究手法が述べられる。性格、WTCと動機の3つの要因に関しては質問紙が実施され、学力試験で測定する学力(CALP)に関してはTOEIC、口答試験で測定する学力(BICS)に関してはTelling A Storyが実施されている。分析方法は、統計ソフト(SPSS)が用いられた。

第4章は、結果が述べられる。性格とCALPには相関関係は見られなかったが、性格とBICSの間に相関関係が見られた。外向的な学生はコミュニケーション力が高く、また外向的な学生は内向的な学生に比べて発話量が多い特徴が見られた。次に、WTCと学力の関係性は見られなかった。また、動機とCALPの関係性も明らかな結果が得られなかったが、動機とBICSとの相関関係は見られた。動機が高い学生はMLRとAR値が低い傾向にあった。また、動機とWTCの相関関係が明らかとなった。動機が高い学生は、あらゆる会話の場面で積極的にコミュニケーションを取ろうとし、動機が低い学生は、特に知人とは話さない傾向があった。性格とWTCの関係性は、外向的な学生は友人や知人と積極的にコミュニケーションを取る傾向があり、内向的な学生は、見知らぬ人とコミュニケーションを取らない傾向が明らかとなった。また性格と動機の関係は、内向的な学生は動機が低い傾向がある。最後にCALPとBICSの関係は、TOEICとリスニングで高得点を取った学生の発話量が多く、また一方でこれらの学生は発話中のポーズが比較的長い特徴があることがわかった。

第5章では、教育的示唆が論じられる。教育的示唆の観点からは、「学生を知る」、「学生がよりよく学べる学習環境を提供する」を念頭に授業運営する努力が必要であると述べられている。学生全員の第二言語習得に関わる要因を考慮して授業実践することは不可能であるのは言うまでもないが、毎回の授業で、学生の負担になりにくい様々な活動を取り入れる工夫が重要であると指摘している。学生に強制することなく、英語活動に安心して取り組める環境を提供するのは教員の役割の1つであり、特に、英語に対して不安を感じている学生には一層の配慮が必要であることを結論としている。

終章では、全体の研究が概観される。第二言語習得に関わる複数の要因と学力の関係の研究はほとんど見られないため、本論は研究領域において新しい可能性を拓くものであると考えられる。個人差を把握した上で、柔軟性のある授業を組み立てる努力をすることを提案し、大学全入時代を迎え、多様性の対応が迫られている日本の英語教育に微力ながら貢献する可能性があることを述べ結論としている。